ぼくたちにできること

前川美和

　五月の連休前の放課後、小学校六年生の和平は、サッカーボールを自転車の前のかごに放り込み、同じクラスの太一を誘って、学校の裏手にある児童公園に行った。二人はそこに遊びに来ていた男の子たちと一緒にサッカーをして走り回っていたが、五時になると、みんな帰ってしまったので、遊び場を砂場に移した。きのう大雨が降ったので、砂場は泥水のプール状態になっていた。和平は靴とソックスを脱いで、泥水の中をバシャバシャと駆け回り、ズボンも服も泥水を浴びて、ひどい有様になっていた。そんな和平を横目で見ながら、太一は一人砂場の周りでリフティングしていた。五時半を回ると、日も傾き、濡れた体が寒くなってきた和平は、太一とともに自転車に乗り、家に向かっていた。

　途中で、近所に住むリリコに会った。和平が声をかけた。

「リリコ、一人で何してるの？」

「うちのマルがいなくなっちゃったの」

「ネコの？」

「うん」

「家で待ってたら、帰ってくるよ。ネコだもん」

「でも、今までこんなことなかったから…」

「もう六時前だよ。早く帰らないと、叱られるよ」

「でも…」

「一緒に帰ろう」

　男の子たちは自転車から降りて、リリコと並んで歩き始めた。時々口々に「マル！」と呼びかける。

　しばらく歩くと、山のふもとに建てられた特別養護施設「なごみ」が見えてきた。まだ明るいからか、施設の庭のいすでくつろぐおばあさんたちがいた。そのおばあさんたちの中の一人の膝で赤い首輪をつけたネコが気持ちよさそうに眠っている。

「あっ、マル！」

　リリコはそう叫ぶと、思わず施設の庭に駆けこんだ。ネコは耳をピクリと動かし、目を覚ましたと思ったら、ひょいとおばあさんの膝から飛び降りると、一目散に山の方に走って行ってしまった。ウトウトしていたおばあさんはびっくりして言った。

「あらあら、嬢ちゃん、どうしたの？」

「あのネコ、うちのネコのマルなの」

「そうなの。かわいい首輪してるから、飼い猫だとは思ってたけど。嬢ちゃんのネコだったの。どうして逃げたんだろうね」

「分からない。いつもだったら、甘えて寄ってくるのに…」

　半分ベソをかいているリリコを見て、おばあさんは言った。

「今度来たら、わたしの部屋に入れといて嬢ちゃんに知らせようか？　お名前は？」

「大山リリコです。わたし、マルが見つかるまで、毎日ここに来ます。おばあさんの名前、聞かせてください」

「村上幸代です。庭に出てなかったら、二〇五号室にいますから、いつでも寄ってね」
隣に座っていたおばあさんも協力を申し出た。
「わたしもネコを見かけたら、幸代さんのとこに連れて行ってあげますよ」
「ありがとうございます」
幸代おばあさんは時計を見て、子どもたちに注意した。
「リリコちゃんたち、もう六時過ぎたわよ。早くおうちに帰らないと…。僕たち、リリコちゃんのボディーガード、頼みましたよ」
「はい、また明日、さようなら」
三人は「なごみ」のおばあさんたちに挨拶をして、庭を出た。太一がリリコに確かめる。
「リリコ、あしたもここに来るのか？」
「もちろんよ。マルのこと、心配だし、約束したもん！」
すると、太一はすまなさそうに、和平に言った。
「和平、ぼく、塾あるから来られないんだ」
「そうか、じゃ、明日は俺がリリコと二人でここに来るよ」
辺りは少し薄暗くなってきたこともあって、子どもたちも知らず知らずのうちに早足になってきた。和平がふと山の方を見ると、ふもとにポツンとぼんやりした明かりが見えた。
「おい、太一。山のあそこ、明かりがついてるよ」
「ほんとだ。何の明かりだろ？　あの辺にはだれも住んでないよね」
気にかかりながらも、今は帰るしかない。ふたたび帰路にギアを入れ換えた。三人は帰宅後、帰りが遅くて心配していたそれぞれの親にきつく叱られた。
次の日、和平とリリコは二人で「なごみ」を訪れた。庭におばあさんたちの姿が見えなかったので、受付で「幸代おばあさんに会いに来た」と伝えると、ホールに案内された。そこでは、おばあさんとおじいさんが、職員のオルガンに合わせて、「むすんで、ひらいて」と歌いながら、手を動かしていた。車いすに座ってやっている人もいる。
「保育園みたいだな」
「うん、でも、みんな笑ってないよ」
「そうだね、楽しくなさそう…。あの隅にいるおじいさんは怒った顔してやってるよ」
二人でヒソヒソ話していたら、オルガンを弾いている女の人ににらまれた。二人は顔を見合わせて、口を閉じた。幸代おばあさんは二人を見つけると、パッと顔を輝かせて近づいてきた。二人をお遊戯の輪から外に連れ出して、小さな声で言った。
「リリコちゃんと、えーっと誰だったかしら…」
「和平です」
「和平君、せっかく来てくれたけど、ネコちゃん、きょうは来てないのよ」
お遊戯を終えた他のお年寄りも珍しい小さなお客さんに興味津々の様子で集まってきた。幸代おばあさんがみんなに説明する。
「この女の子はリリコちゃん、男の子は和平君。リリコちゃんの家のネコ、マルちゃんがいなくなっちゃって、この子たちきのうから捜してるんだけど、だれか知りませんか。赤い首輪をした三毛猫？」
みんな、首を横に振っている。がっかりするリリコたちに向かって、思いもよらない声が飛んだ。

「僕たち、今学校で習ってる歌、歌っておくれよ」
「えっ！」
とまどう二人に、あちらこちらから「歌って、歌って！」の声が上がった。二人は相談して、学校の卒業式にみんなで歌ったアンジェラ・アキの歌を歌うことにした。リリコがオルガンを弾きながら歌い、和平も大きな声で一生懸命歌った。お年寄りたちの顔に生気が差し、みんな熱心に聞き入っている。あの怒っていたおじいさんも笑顔で二人を見守ってくれているようだった。歌い終わると、「アンコール！」の大合唱。結局二人はもう二回歌った。二回目にはサビの部分を一緒に歌うお年寄りもいた。歌詞が心にしみるのか、涙を流しているおばあさんもいた。二人はみんなから拍手喝采を浴びて、照れて頭をかきかき、お辞儀をして、「なごみ」を後にした。
「俺たち、何してるんだろ」
「そうね、なんか変だけど、楽しかったね」
「うん、おばあちゃんもおじいちゃんも一生懸命聞いてくれた」
「うん、歌ってるおばあちゃんもいたよ。よかったね」
「うん」
二人は温かい気持ちに浸っていた。帰りに裏山を見ると、まだあたりが明るいので、きのうのように明かりは見えなかった。和平は意を決したように告げた。
「明日太一も誘って、あの裏山に行ってみようと思う」
「えっ？」
「きのう見た明かりの正体を知りたいんだ。リリコも来る？」
「ちょっと怖い気がするけど、わたしも知りたい」
「じゃ、また、あしたな」
二人はバイバイと手を振って、別れた。

翌日、和平、太一、リリコの三人は自転車で公園に集合した。三人とも決意を秘めた顔をしている。山のふもとに着くと、神社の鳥居が立っていた。山にはそこから入るらしかった。自転車を鳥居の近くの空き地に並べて、三人は鳥居の両側のこま犬をながめた。
「こま犬って、普通、犬だよね」太一が口を開いた。
「そうだけど、このこま犬、犬じゃない。何かな？」と和平。リリコが答える。
「こっちが馬で、あっちが牛かな？」
「こんなの初めて見た。おもしろいね」
太一は目を輝かせている。
鳥居をくぐると、すぐ左手に手洗い場があった。龍の口から水が出ている。小さなひしゃくで水をすくって手を清め、その隣に列をなしているお地蔵さんたちに手を合わせた。太一が興奮した声で言った。
「このお地蔵さんたち、変わってるね。顔が人間じゃない！」
リリコが一つ一つのお地蔵さんの顔を確かめている。
「これはネコでしょ。それから、イヌ、サル、クマ、タヌキ、ゾウ。これ、トリ？ スズメかな。サカナもいるよ。コイ？」
和平も不思議がっている。

「動物ばっかりだな。何の神社だろ？」
「神社の名前がどっかに書いてあるかもしれないよ」太一は確かめに戻ったが、「鳥居の上の方に書いてあるけど、消えかかってて読めないよ」と言いながら、戻ってきた。
　少し進むと、右手に小さなほこらが立っている。その軒から大きな鈴をつけた赤と紫と黄色のひもがたれていた。三人は手をたたいて拝んでから、ほこらの中をのぞいた。暗くてよく見えないが、キツネのような二つの目がこちらを見ていた。そのほこらの両側に設けられた灯ろうに明かりがともされていた。
「この明かりを俺は見たのかな」と和平がつぶやくと、
「多分ね。明かりってこれしかないみたいだよ」と太一が答えた。
　リリコは半袖から見える腕をさすりながら言った。
「なんか、この神社ひんやりしない？」
「うん、ちょっと寒いくらいだね」
　太一も寒そうに首を縮めた。
　前を見ると、山道が続いている。和平が気合を入れるように大きな声で言った。
「あの階段から山に入るんだ。さあ、行こう！」
　山道に入ると、シャクトリムシがあちらこちらの枝から下りてくる。和平が前を行くリリコに「リリコ、背中にシャクトリムシがくっついてるぞ！」と言うと、
「ええっ？　取ってよ、早く！」とあわてた。
　和平はリリコの背中を歩いている黄緑色の虫をつまむと、手の平に乗せて、みんなに見せた。
「おもしろいよな、この歩き方。他のイモムシはたくさんの足を動かしてウネウネ進むけど、シャクトリは違うもんね」
「そうそう。シャクトリは足が全体についてないからね。種類だって、案外多いしさ」
　太一もシャクトリムシに詳しい。
「ギャーッ！」リリコの叫び声に、男の子二人はリリコに駆け寄った。
「どうした？」
「今葉っぱがカサカサって。見たら、ムカデがいた。すぐ枯葉の下に隠れちゃったけど」
「ムカデは毒があるから、気をつけなくちゃね。刺されると、メッチャ腫れるって聞いたよ」
「和平、クモの巣！」
「おっと、でっかいジョロウグモの巣だ。もう少しで巣を壊すところだったよ」
「ヘビとかいないでしょうね。嫌だ」
　リリコがびびり始めた。和平がおもしろがって脅かす。
「あったかくなってきたから、虫だってヘビだっているさ。この辺の山にもマムシ注意って立札立ってるよ」
「えーっ！」
「おどかさなかったら、噛みついたりしないと思うよ」
　太一はリリコをなだめた。ワイワイ言いながら、三十分ほど歩くと、洞窟のようなものが現れた。和平は真っ暗な中をのぞいて言った。
「何かな、これは？　大きな動物の巣？」

太一は自分の推測を述べる。
「そうかな？　これって昔の防空壕じゃない？」
リリコは尋ねる・
「ボウクウゴウって？」
「聞いたことない？　戦争中に爆弾を避けるために作られた穴のことだよ。普通は地面に掘って作られたみたいだけど、自然にある洞窟とかも利用されたんじゃないかな？」
好奇心でうずうずしている和平はしびれを切らして言った。
「入ってみようよ！」
「怖くない？　何がいるか分からないのよ。暗いし…。恐ろしい生き物のすみかだったらどうするの？」
リリコの一言で、和平はゾンビっぽい怪物を、太一はティラノザウルスのような生き物を、リリコはポケモン怪獣を、それぞれ頭に思い浮かべた。そいつらが襲ってくるのを想像すると、今すぐにでも逃げ出したくなったが、和平がきっぱり言った。
「ここまで来たんだよ。入ってみない手はないよ。行くぞ！」
和平が入ってしまったので、太一とリリコも仕方なく後に続いた。明るいところから急に暗い洞窟に入ったせいで、全く何もみえなかった。洞窟の中はひんやりとしていて、なんだか湿った匂いがする。左右の壁に手が触れると、ヌルッとした感覚が伝わってきた。真っ暗の中、手探りで、大人が一人やっと通れるくらいの狭い道を緊張しながら進んでいると、リリコが突然「キャーッ！」と叫び声をあげた。それを合図のように三人は必死で入口へと引き返し、明るい世界に吐き出された。
「どうしたの？」
「何か妙にやわらかいものを踏んじゃったの。グニョって感じ」
リリコが恐る恐る靴の裏を見ると、泥がついているだけだった。三人ともホッとして、なんとなく戦意を喪失してしまった。和平が提案した。
「明日もう一度トライしようぜ。懐中電灯も持って来よう。長靴、はいてきた方がいいかもな。あっ、そうだ、軍手も。二人とも持ってる？」
「草抜きで使うから、あると思う」
「わたし、分からない」
「じゃ、俺、軍手二つ持って来るよ。リリコは大丈夫か？」
「怖いけど、最後まで付き合うよ。神社のこと、お父さんに聞いてみとくわ」

リリコは家に帰って、晩御飯を食べているとき、さっそくお父さんに神社について尋ねた。
「ねえ、お父さん。あの『なごみ』の裏の山の入り口にある神社、知ってる？」
「ここへはリリコが生まれてから越して来たからな。その神社には行ったことがないな」
「そう…。ちょっと変わってるのよ。いろんな動物の顔をしたお地蔵さんがあるの」
「そうか。それは珍しいな。昔からこの辺で暮らしているお年寄りなら知ってるんだろうけどな」
「…。そうだ！　『なごみ』のおばあちゃんに聞いてみよう」
「リリコ、『なごみ』のお年寄りを知ってるのか？」

「うん。この前マルを捜してて、『なごみ』の前を通りかかったら、そこのおばあちゃんの膝で寝てるマルを見たの。捕まえようとして中に入ったとき、話をしたの」
「そうか。神社のこと何か分かればいいね」

改めて神社の前に集合した三人。和平は父親から借りた登山用のライトを頭に付け、ロープ、タオル、傷テープに水とあめを入れたリュックを背負っている。太一は首にタオルを巻き、軍手をはめた手に大きな懐中電灯を持っていた。リリコは長袖、長ズボンを身に着け、頭には帽子をかぶっていた。リリコに軍手を渡しながら、和平は念を押した。
「三人がバラバラにならないように声を掛け合って行こう。きょうこそ何があるか見てやろう！」
「うん。ぼく、神社の名前だけは家にあった古い地図を見て、分かったよ」
「えっ、なんて言うの？　うちのお父さん、知らないって言ってた」
「『鳥獣霊魂神社』っていうんだって」
「『鳥獣』ってトリとケモノ？」
「そうそう」
「じゃ、トリとか動物のための神社かもな。よし、入るよ！」
三人は懐中電灯の明かりを頼りに進む。奥に行くにつれて冷気が下りてくるようだ。ゴツゴツとした壁は濡れているし、地面もぬかるんでいるので、思うようには進めない。でも、我慢してしばらく行くと、地面が渇いてきたので歩きやすくなった。少し余裕の出てきたリリコはあたりをうかがいながら、二人に聞こえるような小さな声で言った。
「何もいないみたいね」
太一は鼻をヒクヒクさせて答える。
「うん。でも何か動物の匂い、しない？」
和平も大きく息を吸い込んで言った。
「する、する。タヌキとかいるんじゃないか？」
三人は固まって、あちこち懐中電灯で照らしながら歩く。十メートルくらい進むと、広い空間に出た。平坦で畳六畳ほどのスペースがある。と、そのとき鈴がチリンと鳴った。和平が音のするあたりを照らした。
「あっ！　ネコがいるよ」
赤い首輪をした三毛猫が隅の方でうずくまっていた。
「えっ？　マル？　マルなの？」リリコが呼びかけた。
「リリコ、逃げてごめんね」
不思議なことに、三人はマルがそう言うのを聞いた。自分一人の幻聴じゃないかと三人は互いに確かめた。
「おい、太一。今マルの声、聞こえたか？」
「ああ、逃げてごめんねって言ってたよね」
リリコもうなずいた。
「マル、どうして家からいなくなっちゃったの？」
またマルの声がみんなの頭に響いてきた。
「あのね。リリコのお父さんとお母さんが話しているのを聞いちゃったの。私を病院に連

れて行って、赤ちゃんをできなくする手術をするって」
「そういえば、マルのいなくなる前の晩、そんなこと言ってた。マルももう大人になったからって」
「わたし、そんな手術したくなかったの」
「でも、手術しなかったら、赤ちゃんがいっぱい生まれて困るでしょ？」
「わたしは全然困らないわ。困るのは人間でしょ？　ネコは一度に赤ちゃんを五、六匹産んで育てるのが当たり前なのよ」
「でも、そんなことしたら、うち、ネコだらけになっちゃうわ。そんなにたくさんネコ飼えないし」
　マルがネコの生態を説明する。
「ネコの子どもたちはおっぱいを飲まなくなったら、自立していくの。つまり、お母さんから離れて一人で生活するのよ」
　太一も話に加わる。
「そうなると、野良猫が増えることになるんじゃない？」
「野良猫が増えると、あっちこっちにオシッコやウンチをするから、臭くなっちゃうよ。うちのお母さんも花壇にウンチされたり、外に置いてるごみ箱ひっくり返されたりして怒ってるよ。ネコってどっからでも庭に入ってきちゃうしね」
　和平も顔をしかめて、野良猫被害を並べた。マルは少しいらだちながら、人間を批判した。
「だいたい人間って自分勝手なのよ！　野生動物のネコをペットにしちゃったのは人間よ。自然の中で生きていたら、そんなに増えないし、小動物や虫を食べて十分生きていられたのに。しかも、ペットが年を取ったり、病気になったら、すぐ捨てちゃう。飼い猫が赤ちゃんを産んだら、目も開いていない小さな命を簡単に殺しちゃう。増えたら困るからって、何のためらいもなく、健康なメスに手術をして、赤ちゃんが生まれないようにしてしまう。人間ってひどいわ！」
　マルの怒りに子どもたちはたじたじになる。太一が絞り出すように言った。
「だからって、野生に戻れるの？　僕たちの周りの環境は昔とは変わってしまったよ。森も山も開発されて、人の住む場所になっちゃったよ」
　みんな言葉を失って、薄暗いスペースでため息をついた。
　そのとき、すぐ近くの壁の方から、小さな声が聞こえた。
「僕は人の家の周りにすんでたんだ。昼間は物陰に隠れてるんだけど、夜になると出て行って、明かりに集まるガとかハエを食べてたんだ」
　声のする方を照らすと、壁にヤモリがくっついていた。壁の色とよく似ているので、よく見ないと分からない。
「何も悪いことしてないのに、その家のおばさん、僕を見つけると悲鳴を上げたんだ。こっちがびっくりするよ。で、子どもが登場して、ぼくを捕まえて、虫かごに閉じ込めてしまった。リンゴとかキュウリを入れてくれたけど、僕、そんなもの食べないから、おなかペコペコで干からびかけちゃった。ふたがきっちりしまってなかったので、命からがら逃げだしたんだ。あぶなかったよ」
「ごめんね。僕たち子どもって虫とかトカゲとか見つけたら、捕まえたくなるんだよ。何

を食べるか知らないくせにね」
　太一が代表して謝った。
「カブトとかクワガタ、もらったことあるけど、虫かごに入れて飼ってたよ。スイカとかゼリーとかあげてたけど、死んじゃった。かわいそうなことしたな」
「わたしもタマムシ、見つけたときは捕まえて虫かごに入れて、学校に持って行ってみんなに見せびらかしたわ」
　和平もリリコも罪をざんげして反省していると、暗闇から地をはうような低い声が聞こえた。
「おまえたち、何をごちゃごちゃ言ってるんだ？　うるさいぞ」
　三人は驚きと恐怖で飛びあがった。リリコはそのひょうしに懐中電灯を落としたが、拾う余裕もなく、三人は出口を目指して狭い道を駆け抜けた。外に出て、ハアハアと肩で息をしていると、何かが洞窟の入り口に近づいてくる音がした。三人は逃げる用意をして、入り口を見つめた。
「おまえら、怖がりだな。ほら、これ、落としただろ？　懐中電灯」
　出てきたのはおじいさん。
「あっ、『なごみ』にいたおじいさんだ。怒りながら『むすんでひらいて』してた」
　リリコが叫んだ。
「おやおや、妙なところを見られたんだな。いかにもわしは『なごみ』にいるじいさんだ」
　子どもたちは声をそろえて尋ねた。
「おじいさんは何をしてたんですか」
「時々ここへ来るんだよ。この洞窟に入ると涼しいし、落ち着くんだ。老人ホームにずっといると、しんどくなる時があるんだよ」
「おじいさん、この不思議な神社のこと教えてくれませんか？」
　リリコは期待に胸を膨らませながら、返事を待った。
「わしが子どもの頃はこの神社は子どもたちの遊び場だったから、よく来たものだ。今は公園もあるし、子どもたちの姿はめっきり見かけなくなってしまったが…。この神社は『鳥獣霊魂神社』といって、トリや動物の魂をまつる神社なんだよ。昔は農作業を手伝ってくれたウシやウマが死んだら、その労働に感謝して、家畜のしっぽに生えていた毛などを奉納して獣たちの魂を慰めていたんだ。そのうちに動物園で死んでしまった生き物や、命がけの漁でとらえたクジラを余すところなく食べつくして残った骨の一部などが持ち込まれて、祭られるようになったんだよ」
「それで、ウシやゾウの顔をしたお地蔵さんが並んでるんですね。神社のことをよく知っている人に会えてよかった。お父さんは全然知らなかったんです」
　リリコは少し口を尖らせて、自分のお父さんを責めるような口ぶりで言った。
「ハハハ。わしは子どもの時からこの辺に住んでいるし、小さい頃から父に神社のことを何度も聞かされたからな。今は家畜を飼う農家もほとんどなくなったし、クジラも地元で祭っているようだから、この神社を訪れる人もいなくなってしまったな」
「おじいさん、洞窟の中には何か動物がすんでいるんですか」太一が質問した。
「住んではいないけれど、時々タヌキやネコやイタチを見かけることがあるよ」
「おじいさんも洞窟の中では動物の声が聞こえますか」

「ほら、よく言うだろ、テレパシーかな？　こっちの心に響いてくるようだね。この洞窟には何か特別な力が働いているのかもしれないな。そういえば、さっきのネコはもっともなことを言ってたな」
　和平は不満気に言った。
「マルの言うことはわかるけどさ、実際にマルの願いを聴いたら、天敵のいないネコはメッチャ増えて、やっぱ困るよ」
「そうだな。人間は困るね。でも、よく考えてみると、人間は、地球に現れてから、ほんのわずかの間に世界中に広がって人間社会を作り上げた。今の世界は人が支配する世界だから、人間中心の価値観やモラルで動いている。ちょっと難しいかな？　えっと、例えば、イヌはつながないとだめだという決まりとか、人間にとって迷惑な虫を害虫とか呼んだりするだろ？　虫はさ、どの虫も自分の好きな葉っぱを食べてるだけなのに。なんかとっても偉そうだよね、害虫とか益虫とか勝手に決めちゃって。それに、最近の人間はみんな今自分が楽しけりゃいいって思ってるような気がする。相手のことはもちろん、身の回りの生き物や未来のことなんてどうでもいいっていうか、関心ないんじゃないかな」
　おじいさんの言葉をしっかり受け止めて、三人は考える。
「俺たちがペットを作ったんだよね。それも間違ってたのかな？」
「ネコやイヌやトリの自由を奪ってしまったのかしら」
「自然の中を走り回ったり、飛び回ったりしているはずの生き物たちを、僕らは狭い自分の家に閉じ込めてしまった」
　おじいさんは子どもたちが真剣に悩んでいる様子を見て頼もしく思った。
「そうとも言えるね。でも、今更ペット化した生き物をどうすればいいのか誰にも分からないんじゃないかな。新しい形の共生を考えださないといけないかもしれないね。君たちにはまだ難しいだろうな」
「それでも、僕たちもしっかり考えないといけない問題です」
　太一はきっぱり言い切った。
「それはそうと、この洞窟にはすばらしい絵があるんだよ。見てみないか？　この中に入るのはもう嫌か？」
「どんな絵ですか」
「それは見てのお楽しみだ」
　三人は顔を見合わせてから、元気な声で「見たい！」と答えた。
「よし。じゃ、行くぞ！」
　今度はおじいさんを先頭にして、みんな余裕の微笑みを浮かべながら、洞窟に入って行った。広くなった空間に着くと、おじいさんは正面の壁を懐中電灯で照らした。そこには畳一畳くらいの大きなマンダラのような絵があった。朱色や黄色や赤、青、緑、ピンクといった鮮やかな色が踊っている。近づいてみると、さまざまな生き物があちらこちらに描かれている。草原では、ゾウ、キリン、シマウマ、バッファロー、ライオン、チーター、ハイエナたちが二重の輪になって楽しそうにダンスをしているように見える。森の中ではサルやリスやモモンガ、ヤマネが木の枝をらせん状に追いかけっこしているし、ネコ、オオカミ、シカ、イノシシ、クマが一列に並んで、前の動物の肩に手をかけて、スキップしている。海ではたくさんのイルカがジャンプし、クジラやサメやカメがこっちを向いて、

手を振っている。動物たちの表情には、見た人が思わず微笑んでしまうようなユーモアがあふれていた。なによりみんなの目を惹きつけたのは、それぞれの動物たちの色だ。ゾウはピンクだし、クマは黄色、シマウマは白と紫色のシマになっている。オレンジ色のイルカ、赤いクジラというふうに、色が遊んでいる。子どもたちは興奮しながら、自分の発見を口々に報告した。

「水たまりにカエルやイモリがいるよ」

「土の中ではモグラとミミズが競争してる！」

「人間、いる？」

「どっかにいるはずだよね。どこかな？」

「いた、いた。洞窟の中でネコとジャンケンしてるよ」

「ほんとだ。笑ってる」

おじいさんが絵について語った。

「おもしろい絵だろ？　戦争で家を焼かれたわしたち一家が戦後しばらくこの洞窟で暮らしたことがあるんだが、そのとき見つけた絵なんだよ。きれいな色で描かれていて、楽しい絵だったので、ろうそくの光の中で弟や妹とおでこをくっつけるようにして、よく眺めていたものだ」

「おじいさん、誰が描いたのか知ってるの？　こんなくらい洞窟の中で」

「神社と何か関係がある絵だと思うけど、誰がどのようにして描いたのかも、何のために描いたのかも分からない。謎なんだ。わしはたまに無性にこの絵が見たくなる。楽しくなるだろ？」

いつのまにかマルもリリコの傍らに来て、絵を見ていた。そして、つぶやいた。

「みんな仲良く弾んでいる。いい絵だわ」

子どもたちとおじいさんとマルはじっと絵に見入っていた。どのくらい経ったのだろう。絵の世界が迫ってきたと思ったら、四人と一匹を包み込んだ。四人は引っ張られるような強い力を感じた。気が付けば、みんな絵の内側に入っていた。いきなり明るい色たちに囲まれた四人は目をパチパチさせながら、マンダラ絵の世界の住人となったのだ。

四人はパステルカラーの落ち葉が重なってできたフカフカのじゅうたんの広がる山道に立っていた。脇には真っ白な花をいくつも付けた木があった。目をこらすと、その青緑色の葉を青いイモムシが顔を上下に動かして、シャリシャリと食べている。そのとき、上空から青い小鳥が飛んできて、イモムシをくわえると、またどこかに飛んで行った。一瞬の出来事だった。おじいさんはポツリと言った。

「ここでも、やっぱり食物連鎖はあるんだな」

リリコが首をかしげている。

「ショクモツレンサって？」

「葉っぱを食べるイモムシがいて、そのイモムシを食べる小さい鳥がいる。それから、その小鳥を食べるワシとかタカとか、大きい鳥がいるっていうふうに、生き物は食べ物で繋がっているってことだよ」博識の太一が教えた。

「ふうん、じゃ、ワシを食べるのはだれ？」

「それは、いないんじゃないかな。肉食の大きな鳥が空の世界の頂点にいるから。仲間に

ヒナを襲われたりはするだろうけど」
　ふと足元に目をやると、赤いアリの行列がバラバラにしたバッタの足や羽を運んでいる。和平がおじいさんに確かめた。
「これも食物連鎖なんですか？」
「そうだね。ムシが死んだら、アリやシバンムシがそれをエサにするし、そのアリをエサにするアリジゴクやアリクイがいるんだからな」
「俺たち人間をエサにする生き物はいるんですか」
「ＳＦ映画では人を捕まえて食料にする話はあるけど、この地球で人間をエサにする生き物、いないんじゃないかな。クマやサメに襲われることもあるけど、それは事故みたいなものだしな。ただ、人が死んだら、普通は燃やすけど、放っておいたら、動物やムシに食べられて、残りは目に見えないくらい小さい生き物のエサになって、結局土にかえるんだ。
　それに、今の世界の王様は人間だけど、科学や医学が発達した今でも治せない病気とかあるだろ。その中に小さい小さい生き物が原因のもあるんだよ。そいつらが人の体の中に入って人をエサにしながら増えていく。食物連鎖の頂上に君臨する人が一番底辺にある小さな生き物にある意味食べられてる。おもしろいだろ？」
「なんか、とても怖いわ」
　リリコは泣きそうな声を出した。
「ごめん、ごめん。死につながるような話は君たちにはまだ早いかもしれないね」
　みんな少し沈んだ面持ちでカラフルワールドに立ち尽くしていた。一瞬、暖かい風が四人の間を通り抜け、みんなの心を軽やかにしてくれた。前を向くと、葉っぱのじゅうたんの左手に青紫色の木々が立っている。その根元で母ネコが子ネコにおっぱいをやっていた。マルが近づいて、静かに話しかけた。
「こんにちは。赤ちゃん、六匹いるのね。一人で育てるの大変ね」
「そうでもないわよ。葉っぱの中にはムシがたくさんいるし、探せば、モグラもネズミもいるわ。川に行けば、魚もいっぱい泳いでいるし。狩りにはちょっとコツがいるから、子どもたちにはしっかり教えてやらなくちゃいけないけどね」
「そうなの。わたしも早くママになりたいな」
「強くて優しい相手を見つけることね」
「ええ」
　マルは本能が目覚め、キラキラしている。ネコの親子とマルの様子を少し離れたところから見守っていた四人も明るい顔になって、振り返り、山のすそ野に広がる景色を眺めた。広大な平原ではピンクのゾウの親子が木陰で休んでいる。薄いオレンジ色のヒツジたちもレモンイエローのヤギたちも悠々と草を食んでいた。ひたすら穏やかな風景に包まれていると、初め色たちに圧倒されていた四人も、だんだんこの世界に慣れてきた。和平もいつもの調子が戻ってきた。
「早く山のてっぺんまで登ってみようぜ！」
「そうだね。もっといろんなものを見に行こう！」
　太一もはやる気持ちを抑えられないようだ。元気いっぱい。足取りも軽い。子どもたちははやりの歌を口ずさみながら、どんどん登って行く。おじいさんは遅れがちになるが、足取りは力強い。子どもたちがおじいさんを気づかって、後ろを振り返ったとき、木々が

ざわついて、落ち葉がカサカサ鳴り、何か生き物が近づいてくる気配がした。おじいさんは子どもたちを守るように手を広げ、音のする方をじっと睨んだ。すると、金色に輝く毛をもつ大きなクマが木々の間から姿を見せた。クマは子どもを二頭連れている。和平は逃げ出したい気持ちをこらえて、勇気を出して、クマに言った。

「俺たち、何もしないよ」

クマの声が聞こえた。

「わたしもあなたたちを襲うつもりはないわ。子どもたちにおいしい木の実のある場所を教えていたのよ」

「そうだったのか。この山に木の実はいっぱいあるの？」

「ええ、たっぷりあるわ。子どもたちもすぐに一人で生きていけるようになるわ」

クマのお母さんは、好奇心いっぱいの目を人間に向けている子どもたちのお尻を押して、先に行くよう促して去って行った。

「びっくりしたわ。食べられちゃうかと思った」

すると、おじいさんがリリコを安心させるように言った。

「あの種類のクマの主食はドングリなどの木の実だよ。おどかさなければ、人を傷つけることはないよ」

気を取り直して、しばらく進むと、今度は上の方から白い犬が飛ぶように駆け下りてきた。リリコも太一も「うわっ！」と声をあげ、足がすくんで突っ立っている。おじいさんは二人をかばうように包み、イヌを叱った。

「こら、こらっ！　そんなに早く走ったら、びっくりするだろ！」

「ごめん。だって、楽しいんだもん。こんなに速く走れるんだよ。どこでも行けるんだ！」

白い犬は体全体で走る喜びを表わし、あっという間に転がるように通り過ぎて行った。子どもたちは思わず笑顔になった。

「なんかすごくうれしそうだったね」

「自由に走れるのが楽しいみたいだ。犬があんなに速く走っているの見たの初めてだよ」

「わたしも。あっ！　トリが飛んでくよ」リリコが叫ぶ。

「大きいトリ！　フラミンゴじゃない？」

「動物園ではよく見るけど、飛んでるの見たことなかったわ」

「フラミンゴが群れて飛んでる。きれいだね」

みんな空を見上げて、夕焼け色のフラミンゴや日頃ペットショップのかごの中でしか見られない黄色や青のインコ、緑のカナリヤが大空をはばたく様を見て、心躍らせた。マルも目を真ん丸にして見つめている。

四人は道すがら、いろいろな生き物に心を奪われながらも、なんとか山頂にたどり着いた。上から見わたすと、豊かな森が四方に広がっていた。登ってきたのとは反対の方角のふもとには川が見えた。

「あっ！　人がいる！」

「ほんとだ。子どもが二人いるね」

「早く下りて、会いに行こうぜ！」

和平は言うが早いか走り出した。

「下りは走ると危ないよ。気を付けて！」

おじいさんの言葉に、大きな声で「はーい！」と返事をして、少しスピードを落とした。太一もリリコも和平を追った。

二人の幼い子供たちは、いきなり山を駆け下りてきたお兄さんたちにびっくりしている。「こんにちは！」和平が声をかけた。上の男の子はか細い声で「こんにちは」と返したが、下の女の子は男の子の後ろに隠れてしまった。でも、マルが近づくと、両手でマルを抱き上げ、優しく頭を撫でている。子どもたちの声を聞きつけて、若い女の人がかわいらしい家から出てきた。

「あら！　こんにちは。山に登ってたの？」

太一が代表で答える。

「はい」

「何か見つけた？」

「ネコとクマとイヌに会って、ちょっと話しました」

「そう」

「みんな楽しそうでした。ここには人もたくさん住んでいるんですか」

「さあ、どのくらいいるのかしら。遠くに行かないから、よく分からないわ」

「そうですか…」

「主人が晩御飯の魚を川で捕ってるの。これから子どもたちと見に行くんだけど、一緒に行く？」

「はい！」

「お兄ちゃんのほうが、四歳でユウ、下の子は二歳でトモっていうの。仲良くしてやってね」

ユウもトモも安心したのかニコニコしている。　和平たちも自己紹介した後、リリコはトモの手を引いて、ユウは二人のお兄ちゃんたちにはさまれるように、おじいさんはお母さんと並んで、川に向かった。川岸では釣糸をたれたユウたちのお父さんがこちらを向いて手を振っていた。バケツには大きな赤い魚が三匹入っていた。お父さんは「大漁、大漁。ごちそうだぞ、今晩」と言って笑った。子どもたちは「川だ！」と歓声をあげ、素足になって透明な川に入り、泳いでいる小魚を捕まえようと必死だ。川べりに腰かけて、子どもたちのはしゃぐ様子をしばらくうれしそうに眺めていたお母さんが「さあ、帰って、晩御飯をみんなで準備しましょう！」と腰を上げると、子どもたちはなごりおしそうにしていたが、お父さんの釣りの荷物などを分けて持って、家路についた。

家に帰ると、お母さんは米をといで、かまどにまきを燃やし、ご飯を炊く用意をしている。その隣でおじいさんは釣ってきた魚をさばいて、塩、コショウしている。子どもたちはお父さんと、てんぷらにする山菜摘みに精を出している。御飯が炊き上がるころには魚のムニエルも山菜天ぷらもできていた。焦げたバターの香りが食欲を刺激する。まだ明るい庭でみんなでごちそうを囲んだ。お兄ちゃんたちがパクパク食べるのを見て、ユウもトモも一生懸命食べている。マルもお相伴にあずかっている。

「ごはん、おいしいね」

「おかわり！」

お母さんはおかわりをよそうのに忙しい。おじいさんは山菜天ぷらに舌つづみをうちな

がら尋ねた。
「電気も水道もないんですか」
「ええ、山のふもとですからね、でも、川もあるし、井戸もあるんですよ。火種は初めから家のかまどにありましたしね。たきぎは山に入れば嫌というほどありますし。生活に必要なものはすべて与えられているんです」
お父さんがこたえたが、おじいさんは納得できかねるというふうに首をひねった。
「与えられている？　だれかが準備してくれたのですか」
お父さんはニコニコしながら、答えようとした。
「だれというか、この世界を形作った力というか意志というか…。とても説明しにくいのですが…」
太一がすっとんきょうな声を出した。
「あっ！　『鳥獣霊魂神社』の神様でしょ？」
「神というならば、神なのかもしれませんね」
おじいさんと子どもたちは今まで自分たちが体験してきた不思議な出来事を思い出していた。

すると、当たりが急に暗くなり、お父さんとお母さん、ユウもトモも何もかも一瞬で、かき消えてしまった。四人と一匹の周りだけが明るく照らされている。そして、どこからともなく低いけれど温かい声が響いてきた。
「この世界はどうでしたか。楽しめましたか」
子どもたちはあまりの驚きに口をパクパクさせるだけで、声が出てこない。おじいさんが静かな声で答えた。
「目のくらむような色の世界ですね。動物たちも人間も幸せそうに暮らしています」
「幸せそうでしたか。あなた方が出会った動物たちは、あなた方の世界ではとてもつらく悲しい体験をしたのですよ。ネコは子どもを産むたびに、その子猫を池に捨てられていました。ある夜、飼い主が生まれたばかりの子猫を池に捨てようとしたのを見た母ネコが飼い主の手に飛びかかったのですが、怒った飼い主が子猫もろとも母ネコも池に投げ込んでしまったのです。わたしはネコたちを哀れに思い、この世界に魂をいざない、親子の幸せな暮らしを与えたのです」
「じゃ、白いイヌも？」
「あのイヌは十年間ずっと短いロープにつながれたままで、散歩にも連れて行ってもらったことがなかったのです。あのイヌは糞尿にまみれ、皮膚病を患い、とうとう死んでしまいました。そんな一生、想像できますか。クマは暖かい冬に冬眠できず、エサを求めて里に下りてきたところを村人に見つかり、撃ち殺されてしまいました。まだ小さいコグマは一人で生きてゆけず、飢え死にしてしまったのです。クマが冬眠できなかったのは、どうしてでしょう？　クマのエサが少なくなったのは、どうしてでしょう？」
太一が重い口を開いた。
「僕たち人間が生活する中で出すガスが原因で地球全体が少しずつ暖かくなってきていると聞いたことがあります。それで、冬も冬眠するほど寒く無くなっちゃったんでしょう？　エサが少なくなったのも人間がクマたちの棲む山を切り崩して、家を建てちゃったから、

どんどんクマの棲むところもエサも減ってきたんですよね」
「そうですね。あなたたちの世界はもとは豊かな自然に恵まれていました。空気も水も土もきれいで、生き物をはぐくむのに適していました。ムシもサカナもトリも動物もすばらしいバランスを保ちながら共存していたのです。人が現れて、そのバランスが崩れてしまいました。人間は野生の生き物をむやみにペットにし、人間の住む空間に持ってきている。ネコやイヌをはじめ、リス、ウサギ、カメ、イモリ、カメレオン、それに、カブトムシやクワガタなどのムシに至るまで、生き物たちの自由を奪い、狭いかごや水槽やオリに閉じ込めました。飼いやすくするために、小型にしたり、体毛を無くしたりというような遺伝子に手を加えることにさえ、何のためらいもありません。大形の動物たちの場合は、彼らに適した環境から引き離し、動物園という入れ物に放り込んで見世物にしている。自由に飛べないように羽を切られたトリたち。狭いプールをグルグル回ることしかできなくなったアザラシなどの海獣の哀れな姿。冷たいコンクリートの閉じられた空間で暮らすことを余儀なくされた動物たちの目を見たことがありますか。知能が高いと言われるチンパンジーやオランウータンたちのあきらめたような寂しい目。まだ、今でも山には野生の動物がすんでいますが、クマやイノシシ、シカ、タヌキやイタチなどは人間に自分たちのすみかを奪われつつあるのです。人間は他の動物を踏みにじることに良心のかしゃくを覚えずにここまできたのです。
　さらに、恐ろしいことに、人はかわいいはずの自分の子どもさえ殺してしまうのです。あなた方が出会って、一緒にご飯を食べた家族。あの二人の子どもたちは、両親がいるにもかかわらず、鍵のかけられたアパートに一週間放っておかれたのです。汚いアパートで生ゴミの中で死んでいたのですよ。わたしはあまりにも悲しい二人の魂を救い、優しい両親を用意しました。親に愛され、安心できる日々を与えたかったのです」
「じゃ、病気や事故で死んだ魂もこの世界でもう一度生きることになるの？」
「いいえ、そういうわけではありません。わたしがこの世界に迎えるのは、理不尽に生きる自由を奪われて死んだ魂たちと、誰からも愛されず愛することも知らずに死んだ魂たちなのです。病気も事故もその人が望んだわけではないのですが、その人の周りに愛してくれる存在があれば、その人は不幸とは言えないのではないですか？」
「でも、そうやって悲しい魂をこの世界に迎え入れてたら、この世界はたくさんの動物や人でいっぱいになってしまいませんか」
「それは心配しなくてもいいのですよ。この世界では肉体を得た魂が愛を実感し、自由を手に入れて、幸せを感じることができたとき、また魂に戻るようになっているのです。今度は幸せな魂として昇華するのです。だから、この世界にいる期間はそれぞれ違います。ここに来て、一週間で戻るものもあれば、二、三年とどまるものもあります。この世界に生き物が増えすぎることがないようにうまくコントロールされているのですよ」
　みんな各々の頭をフル回転させて、この世界の創造主の言葉を理解しようとした。それでも、答えの出せない質問を和平が口にした。
「俺たちに何ができるのかな？」
「そうですね。難しい質問ですね。あなたたちの世界は大きくなりすぎましたから、人間の力では、その世界の進む方向を変えることはできないでしょう。まして、あなたたちのような子どもやお年寄りには、そんな力はないでしょうね。でも、わたしの創ったこの世

界に来なければならない悲しい魂を減らすことはできるかもしれません。あなたたちにしかできないことがきっとありますよ。自分たちの世界に戻ったら、真剣に考えてみてください。それがわたしの希望です」
そう言い終えると、どこからともなく大きな手が現れた。四人とマルは大きな両手に優しく包み込まれ、一瞬空中に持ち上げられるような感覚に襲われた。そのあとふわっと静かに下ろされた。

気が付くと、洞窟の中のマンダラ絵の前に立っていた。和平が目をこすりながら、みんなに確かめる。
「夢じゃないよな？　俺たち、別の世界を見てきたんだよね？」
「そうだよ、この絵のなかの世界に入ったんだ」
「わたしもトモちゃんの手の温かさを覚えてるわ」
おじいさんは子どもたちに何か変わったことがないか心配した。
「みんな、大丈夫か？　どこも痛くないか？」
三人は口をそろえて「大丈夫！」と答えた。リリコはマルに話しかける。
「マルも大丈夫？　マルはこれからどうするの？　一緒にうちへ帰る？」
「大丈夫よ、リリコ。わたし、やっぱり自由でいたいから、リリコのうちには帰らないわ。ごめんね」
「野良猫になったら、エサにも困るし、冬は寒いよ」
「うん、分かってる。でも、試してみたいの、自分の力を」
「もし、辛かったら、我慢しないでいつでも帰ってきていいよ」
「ありがとう」
マルは洞窟を出て、山の方に入って行った。
四人も洞窟を出た。公園の方から、「夕焼け小焼け」のメロディーが流れている。
「五時か。俺たちここに来たの二時くらいだったよな。三時間しか経ってないのか。もっと長くあっちの世界にいたような気がするけど…」
太一もリリコもうなずいた。おじいさんは子どもたちの顔を一人一人見つめて言った。
「きょういろいろな体験をしたね。心も体も疲れただろう？　家に帰って風呂に入ってしっかり眠りなさい。そして、明日『なごみ』に顔を出してくれないか？　みんなで何かできることはないか考えてみよう。それはあの世界を見た私たちの使命のような気がする」
太一は力強く「ぼく、家に帰ったら考えるよ。何か答えみつけたい！」と言うと、和平もリリコも「俺も！」「わたしも！」と続いた。おじいさんも自分自身を励ますように「わしも考えてみる」とうなずいた。リリコが恥ずかしそうに尋ねた。
「あのね、おじいさんの名前は？」
「真田綱吉」
太一が目を丸くして叫んだ。「あの犬将軍の？」

次の日、学校が早く終わったので、一時半頃、和平と太一とリリコの三人は「なごみ」に行った。真田のおじいさんは子どもたちの自分の部屋に招き入れた。
「どうだい？　いい考えは浮かんだかい？」

おじいさんの問いかけにリリコが最初に答えた。
「あの洞窟に入ったら、動物たちの声が聞こえるでしょ？　だから、時々あそこに行ってみるの。もし、動物がいたら、その動物の気持ちが聞ける。わたしたちにやめてほしいこと、やってほしいことが分かると思うの」
「なるほどね。いい考えだね。ただ、子どもたちだけであんな暗いところに入るのは危ないよ。もし、悪い人が君たちの跡をついてきていたり、洞窟に隠れていたりしたら大変なことになるからね。洞窟に入るときは『なごみ』に声をかけてほしいな。だれか付いて行ってあげられる大人がいるからね」
「はい、そうします」
「和平と太一はどうだ？」
　太一は自信なさげに話し始めた。
「あそこの神様が言ってたでしょ、悲しい魂を減らすことはできるんじゃないかって。小さな生き物の自由を奪わないようにする、つまりさ、僕たちの周りにいる身近な動物や虫を大切にして、オリとかかごに閉じ込めないようにするとか…」
「それなら、俺にもできるよ。うちの犬のロッキーをしっかり散歩につれていってやったり、遊んでやったり…。それと、虫とかカエルを捕まえても、虫かごに入れて放っとかないで、すぐ元の場所に戻してやる…。あっ！　俺より小さい子たちに命の大切さを教えてあげることもできるよ」
「みんなよく考えたね。生き物はみんな愛情を与えられたら幸せだし、また自分も相手に優しくしてあげたいと思うものだからね。わしの力の及ぶ範囲といえば、この『なごみ』という施設での生活になる。わしも含めて、年寄りが幸せを感じられるような終の棲家にしたいと思う。体の自由が利かなくなって自力では歩くことも食べることすらできなくなっても、認知が進んで自分が誰なのか分からなくなっても、幸せを感じることはできるはずだよ。思いやりのこもった介護をしてもらったときもそうだし、自分の存在価値を実感した時もうれしいんじゃないだろうか。ごめん、ちょっと難しい言い方になってしまったね。つまりね、自分のすることがだれかのためになっていると思えたら、生きる力が湧いてくるっていうのかな…。人間ってそういう生き物の気がする。人によってできることはいろいろだけど、ここのスタッフと入居者が協力して見つけていけば、みんな生きる張り合いを失わずに暮らせると思うんだよ」
　三人は自分たちを子ども扱いしないで、真剣に語ってくれる真田のおじいさんの熱気のこもった一つ一つの言葉をしっかり胸に刻んだ。
　三時になると、おやつの時間なので、子どもたちも食堂に行って、入居しているおじいさん、おばあさんと一緒におやつを食べた。幸代おばあさんの顔も見える。和平も太一も大きな草餅を一口頬張って「うんまい！」と叫び、一瞬で食べてしまった。その様子をニコニコ見ていたおばあさんたちが次々に「わたしのもお食べ！　わたしは歯が悪いから食べづらいんだよ」と自分の草餅を子どもたちに差し出した。
「だめだよ。これはおばあちゃんのおやつだろ。おばあちゃんもしっかり栄養摂らなくちゃいけないよ」と和平に諭されると、おばあちゃんたちはしょげてしまった。
慌てた和平が「じゃ、半分もらうよ。半分こにしよう！」と餅を半分にちぎって、「大きい方は俺がもらう！」と言った。太一もリリコも餅を半分にちぎって、おばあちゃんたちに

渡すと、みんなうれしそうに半分になった餅を口に運んで、「おいしいね」と繰り返した。スタッフのおねえさんも笑顔で餅を食べながら言った。
「この草餅は幸代おばあちゃんとタカエおばあちゃんに作り方を教えてもらって作ったんですよ。ヨモギも摘んできてね」
リリコが歓声を上げる。
「すごい！　手作りの草餅、とってもおいしかったです。作り方、教えてくれませんか」
おねえさんは少し考えてから、提案した。
「じゃ、またヨモギ摘んできて、みんなで作りましょうか？」
「うわあ、クラスのみんなにも声かけてもいいですか」
「俺らも友達連れてきてもいいかな」
リリコも和平たちも目を輝かせる。
「そうね。来週の土曜日の昼からなら、ここの調理場使えるから、君たちのお友達とここのお年寄りと一緒につくってみようか？」
「やったあ！　うれしい！」

当日、三人は昼ご飯を急いで詰め込むと、それぞれ友達を誘って、「なごみ」に集合した。子どもたち総勢十六人。まず、歩けるおじいさんとおばあさんが子どもたちを連れて裏山に行って、ヨモギを摘んだ。子どもたちはどれがヨモギか分からない。毒のある草もあるので、教えてもらいながら、大きなざるにいっぱい取った。ゴミを取り除き、大なべでゆでてから、まな板の上で細かく刻み、すり鉢ですりつぶす。子どもたちは順番で刻んだり、すりつぶす作業を手伝っている。日頃物静かなおばあさんたちも、子どもたちにいろいろ指導するのに元気な声をだし、大きな声で笑っている。ときどきおじいさんに叱られながら子どもたちも一生懸命だ。粉を熱湯で練ったら、少しずつちぎって平たくする。子どもたちの出番だ。いろんな大きさのいろんなかたちに仕上がった団子を蒸してから、ヨモギと混ぜる。まんべんなく混ぜるのにはなかなか力が要る。餅の塊を四つに分け、子どもたちも四つのグループに分かれて、緑の餅になるまで「よいしょ、よいしょ！」とこねた。あとは小さくちぎってあんこを包んで丸める。小さな手や大きなふっくらした手、シワシワで筋張った手で丸められた緑色の餅が次から次に並べられていった。
できたての草餅は少し遅いおやつのに時間にみんなで食べた。ヨモギの香りと甘いこしあんが絶妙なハーモニー。お年寄りはひ孫のような子どもたちと話している。
「わたし、あんまりまんじゅうとかたべないし、あんこ、好きじゃなかったけど、この草餅、めっちゃおいしい！」
「おばあちゃんが子どもの頃は戦争中だったから、甘いものなんか食べられなかったのよ。あんこはとっても貴重な食べ物だったわ」
「へえ、お菓子もなかったの？」
「毎日食べるお米もなかったんだから、お菓子なんてとてもとても…」
戦争中の食べ物や怖かった体験などに子どもたちは熱心に耳を傾けていた。話すお年寄りの顔も生き生きとして楽しそうだった。おやつの時間が終わり、後片付けも住んで帰るとき、リリコが尋ねた。
「またおばあさんやおじいさんの話、聞きに来てもいいですか」

「いつでもおいで。おいしいおやつも作ろうね」
「はい、ありがとうございました！」
子どもたちは大きな声でお礼を言った。真田おじいさんは玄関まで子どもたちを見送りに来てくれた。
「年寄りたち、みんなのおかげでとても生き生きと楽しそうだった。自分の持ってる知識とか技とかを、次の世代を担う君たちのような子どもたちに教えるっていうのがうれしかったんだろうな。わしも含めてね。あっちの神様から出された宿題に対するわしの答えのヒントをもらったよ。ありがとう」
「おじいさん、お願いがあるんです」と、和平が切り出した。
「クラスのみんなに洞窟のこと話したら、みんなも行きたいって言うんです。家でイヌとかカメとかムシとか飼ってる子が、自分の大切なペットが思っていることを聞きたいって…」
「そりゃあ、だれでもそう思うよね」
「でね。みんなで一緒に洞窟に入りたいんだけど、おじいさん、来てくれる？」
「もちろん、ついて行ってあげるよ。でも、わしは見てるだけだよ」
「うん、じゃ、みんなに言って、いつがいいか決めたら、また来ます」
「分かった。気を付けて帰りなさい」
「はい。さようなら」
和平と太一とリリコは帰り道、いろんなことを振り返り、三人三様の思いに浸りながら歩いていた。和平がその思いを口に出す。
「おばあちゃんもおじいちゃんもすごく元気だったね」
「ぼくたちもとっても楽しかったよね」
「昔の話も聞けてよかったわ。うち、おばあちゃんもおじいちゃんも一緒に住んでないから…」とリリコ。
「そうだよね。たまに会っても、そんなにゆっくり話を聞くこともないしな」
和平も相槌を打つ。太一は遠くを見つめながら、つぶやくように言った。
「きょうみたいな時間、もっといろんな人ともっといろんな場所で作れたら、みんな元気になれていいのにね」
「うん。みんな、生きてるっていうか、生きることに参加しているっていうか…」
和平が言葉を探していると、太一が続けた。
「つまり、生きてることを実感できる時間が持てるってことかな？」
「さすが太一。そういうことだ。あっちの神様が言ってた幸せを感じることができるってことなんじゃないのか？」
三人は神様の問いかけに対して、自分たちなりの答えが見つけられたようでうれしかった。気が付けば、神社の前に来ていた。和平がいたずらっ子の目をして言った。
「おいっ！　あの洞窟へ行ってみないか？」
「もう夕方だし、子どもたちだけでいくなって、真田おじいさんが…」
「懐中電灯も持ってないから無理だよ」
「冗談だよ。今度はクラスのみんなといっしょに来ようぜ」

三日後、太一と和平は同級生の剛、早紀、翼と、おじいさんといっしょに洞窟の中にいた。剛と翼はそれぞれアマガエルとナナフシの入った虫かごを抱えている。早紀は小さいウサギを抱いていた。懐中電灯で照らされた三人は緊張のせいか怒ったような顔をしている。まず聞こえてきたのはミニウサギの不満だった。

「わたし、いつもケージの中でひとりぼっち。寂しいし、退屈なの。早紀ちゃんが帰ってきたら、抱っこしてくれるけど、もっと跳び回りたいわ」

「うち、アパートで、庭ないから…」

「それと、毎日なんか硬い食べ物、ポロポロって皿にいれてくれるけど、おいしくないし、飽きちゃった。新鮮な葉っぱとかほしいわ」

「分かったわ。キャベツやニンジンもあげるわ。公園にもいっしょに連れて行ってあげる。でも、公園から出て、どっかに行ってしまわないでね。車もたくさん通るし、野良猫だっているから、あぶないよ」

「約束するわ。早紀ちゃんがわたしのこと大事にしてくれてるの分かってるから」

早紀はにっこりして、ウサギのミミをギュッと抱きしめた。

次はほっぺを膨らませながら、アマガエルが愚痴る。

「いいよな、ウサギは。俺なんかエサ、もらってないからな」

剛はあわてて反論する。

「ソーセージやったって、ジャコやったって食べないじゃないか」

「ソーセージ？　俺は生きたムシしか食わないんだぞ。飛んでるハエとかバッタとか、くれよ！　はらぺこだ」

「えーっ！　そんなの無理、無理！」

「じゃ、元の場所にもどしてくれよ。あそこいっぱいムシがいて、最高だったんだぜ」

「…。うーん、仕方ないな。帰りに池の茂みに戻しに行くよ」

「よーし、いい子だ」

最後は息も絶え絶えにナナフシが訴えた。

「もうだめだ。飢え死にしてしまう。僕は枝みたいに見えるけど、生きているんだよ。つまり、何か食べないと死んじゃうんだ」

翼は頭を抱えて言った。

「やっぱそうだよね。毅にナナフシはエサをやらなくても一か月は大丈夫だよなんて言われたから、そうかなって…。何を食べるの？」

「バラの葉っぱが好きなんだ」

「そういや、毅の庭のバラの木についてたのをくれたんだ。ぼくんちバラないからな」

「バラじゃなくても、広い葉っぱなら、僕が食べられる可能性が大きいよ」

「じゃ、公園の木に放してあげるよ」

「ありがとう」

子どもたちは何を食べさせたらいいのかも知らないで、捕まえてきて飼おうとしていた自分たちを恥ずかしいと思った。洞窟から出るや否や、走り出して、公園や池に向かった。おじいさんは微笑みながら、走り出す子どもたちを眺めていた。

「いいことをしたな。カエルとナナフシは命拾いをしたね」

「生き物を取ってきて飼うって難しいんですね。虫たちにとって、今いる環境が一番幸せ

なのに、そこから引き離して小さなカゴに閉じ込めるって、残酷なことなのかも…」
太一がしんみりした様子でつぶやいた。
「そうだね。ただ人間は、特に子どもは好奇心の塊みたいなものだからな。小さな生き物を見たら、触りたいし、捕まえてよく見たいし、自分のものにしたくなるのも分かるよね。よく観察した後で、元の場所に帰してやるのがいいかな」
おじいさんの言うことを聞いて、和平も太一も少し元気を取り戻して、おじいさんにお礼を言った。
「それなら、俺たちにもできるし、他のみんなにもアドバイスできる。おじいさん、きょうは付き合ってくれて本当にありがとうございました」
二人は頭を下げて、洞窟を後にした。帰り道、いつもの調子を取り戻した和平が言った。
「明日、日曜日だろ？　朝、うちのロッキーを散歩に連れて行くとき、リリコも一緒に洞窟に入るっていうのはどう？」
「えーっ！　また？　子どもだけはまずいんじゃないのか？」
「ロッキーがいるよ」
「ちょっと苦しいけど、うーん、まっ、いいか。そうしよう。リリコも来たいだろうしな」

翌日朝八時に、和平はロッキーを連れて神社に行くと、太一とリリコは懐中電灯を手にして、待っていた。
「よし、行くぞ！」
「おお！」
三人は意気揚々と洞窟に入って行く。狭い道を通り抜け、ひろい空間に出た。ロッキーは興奮して、ワンワンほえていたが、やがて、ロッキーの思考がみんなの心の中に流れてきた。
「おやつ、他の犬の匂いがするぞ。だれかいるようだな」
その声に応えるように、か細い声がした。
「こっちよ。絵のそばにいるのよ」
リリコが絵のほうを照らすと、小さな茶色の犬がポツンといた。太一がびっくりして言った。
「あれっ？　モモだろ？　モモ、どうしたの？」
「あっ！　太一！　どうしてここに来たの？」
「この洞窟、偶然見つけて、みんなで入ったんだ。動物の声を聞くことができることも知ったんだ。モモはどうしてここにいるの？　外へ出ることなんかなかっただろ？」
「わたし、いつも窓から外眺めて、外に出たいなあって思ってたの。子どもたちが走り回ってて、花の周りをチョウチョやハチが飛んでて…。散歩してるイヌがとっても羨ましかった」
「お母さん、モモをとても大切にしてたんだよ。外に出したら、怪我したり、病気が移ったりするといけないからって。前に飼ってたイヌ、交通事故でなくしちゃったからね」
「お母さん、わたしのこと大好きなのはわかるけど…。わたし、この服も嫌なの」
「かわいいよ」
「イヌは服なんか着ないで、裸で生活する生き物なのよ。服はイヌにとって邪魔で窮屈な

ものでしかないわ」
「そうだったのか。分かった」
太一はモモに近づいて、ピンクのTシャツを脱がしてやった。ついでに耳に付けたリボンも取ってやった。
「太一、ありがとう」
「家に帰らないのか？」
「帰るけど、もう少し外にいたいの。行きたい所に自由に行って、いろんなものを見たり、いろんなこと、体験したいわ」
「そうか…」
がっかりする太一をリリコは慰めた。
「モモは帰るって言ってるんだから、大丈夫よ。必ず帰ってくるわ」
「そうだね。でも、いいと思ってやってることが動物にとっては迷惑なこともあるんだね。人間の自己満足ってことかな？　室内犬にもやっぱり散歩は必要なんだな」
「モモの本当の気持ちが分かってよかったじゃないか。モモはこれから太一の家でもっと快適に暮らせるんだよ」
和平も太一を励ました。
「そうだね。前向きに考えないとね。やっぱこの洞窟すごいや」
笑顔を取り戻した太一は二人の顔を交互に見て、言った。

和平、太一、リリコは暗い洞窟を出て、明るい光の中にいた。元気よく走り出したロッキーに引っ張られながら、散歩を続ける。それは、三人にとって、自分たちの使命を果たすための長い散歩になるかもしれない。

〈了〉